

ぎないものにするために、私たちが忘れてはならない思いです。それは、新体系に移行した後も、変わることなく持ち続けなければなりません。

港第二も、来春いよいよ新体系への移行を考えております。働くことを支援する港第二は、やはり就労移行支援事業を中心に多機能型とする予定です。障害者雇用が広く語られるようになった昨今、福祉と雇用の連携は図られつつありますが、厳しい雇用情勢等、課題は山積んでいます。2年という就労移行の有期限もその一つです。就労支援は単に職場を斡旋するだけのものではありません。働き続けるための力を身につけること。また、自立生活のイメージも大切です。それらに取り組むためには時間が必要ですから、他事業と組み合わせ、できるだけ現状の5年に近い期間を用意できるよう検討をし、利用者の方々の『働きたい』という気持ちに寄り添えるような支援体制を作りたいと思います。

大役を仰せつかり、まだ落ち着かない日々ではありますが、みなさまのご指導をいただきながら、職員ともども奮起してまいりたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

地域生活支援センター
所長 伊藤 勝啓

この度、人事異動により、地域生活支援センターの所長として着任いたしました。

私が育成会に就職したのは15年前の平成7年で、港第二育成園・港育成園で5年間勤務しておりましたので、実に10年ぶりの港エリアでの勤務となります。私が師と仰ぐ、故山川 宗計氏が起ちあげた支援センターに配属となったことにあわせ、着任早々、昔に担当していた利用者が地域で元気に自立して生活している姿を見ることができ喜びが湧きました。

しかし、喜びばかりに浸ってもいられません。廃案になったとはいえ障害者自立支援法の下では通勤寮は制度化になく、宿泊型自立訓練等、新体系への移行が急務であります。今までの通勤寮の良さを残しつつ新しい事業の意義や、定員や個室化の問題を含め、職員と議論をしながら自分自身、一からの勉強となります。

また、支援センターの近隣にはバックアップするグループホームが10ヶ所あり、また地域で単身生活をされている方もたくさんいらっしゃいます。彼ら・彼女らの

生活を守りながら、いかに地域に攻め入っていくかが大きな課題ではありますが、現場スタッフ・世話人の熱い想いと、そうした勤務に対する正当な「評価」があれば、必ず課題は克服できると思います。

まだ半月ほどしか勤めておりませんが、今後、新体系への移行業務を進めていくとともに取り組んでいかなければいけないことがあります。それは「生活環境の整備と高齢化対策を含めた病気の予防」であります。現通勤寮は通過型施設とはいえ「生活施設」であり、グループホーム・ケアホームは、まさしく「生活をする場」であります。決して広い空間ではありませんが少しでも家庭らしい環境下で、本人が健康で本人らしく過ごせるような環境整備に努めていきたいと思っています。なぜなら私が転勤前に勤めた福島第一育成園・福島第二育成園の2年間で学んだことは「利用者の生命と健康を守る大事さとしんどさ」に尽きるからです。福島で学んできたことをセンターで生かすことによって、福島への御恩返しになればと思います。

どうぞ皆様方のご指導・ご鞭撻を賜りますことをお願い申し上げます。所長着任のご挨拶とさせていただきます。

暮らしに向きあう

福島第一育成園
園長 角森 佐岐子

この度、福島第一育成園の園長に就任いたしました。どうぞ、よろしく願いいたします。

前職の東成育成園とは、ご利用者様の年齢も施設利用の目的もまったく違うことに戸惑いながらも、職員の方の『命を守る』という決意を感じる働きに触れ、自分のなすべきことを一日も早く見つけたいと思う毎日を過ごしております。

ご承知のとおり、福島第一育成園は入所施設です。利用に至った経緯はそれぞれですが、ほとんどの方が最良の選択肢として受け入れているわけではないと思います。できれば家族といつまでも暮らしたいけれど、それは叶わない願いであることは誰もが知っていることです。今も昔も、親亡き後の子の暮らしは、最大の心配事であることは変わっていないでしょう。

施設を管理する者として大変心苦しいのですが、私たちの施設は『その人らしい生き方』を支えるには、あまりにも力不足です。もちろん、職員はできる限りの努力